



我流・歴史を2倍 楽しむ方法

ならやまに秦の始皇帝の末裔？！

吉川 利文

当会の先輩会員川勝孝雄さんは地味なお方だ。時折、ベースキャンプの出入り口に当たるところの水路の木製蓋を金づちや鋸を使って黙々と修理している。私はその姿を拝見するたび「こんな会員が会を支えているのだろうな」と心中、敬意を深めていた。

それがある日急にとても近い人になった。今は同好会に改編された歴史文化クラブの、あるフィールドワークで、クラブ会長の故川井秀夫さん（当会の創設者）が、川勝さんを指して「この人は、古代史に出てくる秦河勝（はたのかわかつ）の末裔なんや」と大声で参加者に紹介したのだ。

「えっ、ほんまかいな」。ビックリはしたものの、その時は話し半分に聴いていた。しかし、秦河勝は古代史の有名人。とても気に入り、それから何日か後、当の川勝さんに「この間の川井さんの話、本当ですか」と単刀直入に尋ねてみた。「うん、ほんまや」。川勝さんの答えは、私にとって、むしろ拍子抜けするくらい率直で明快だった。私は歴史的事実の真偽はともかく、川勝さんの率直さに惚れてしまった。川勝さんにもっとお近づきになるため、大工仕事の面で“弟子入り”をした。

そんな折、終活を兼ね、積んどくしておいた本を整理している時、たまたまみつけた「謎の渡来人 秦氏」（文芸春秋社、水谷千秋著）という本に心を奪われた。

秦河勝が聖徳太子に信頼され、太子の側近として活躍した伝承はよく知られているが、私が仰天したのは、その秦河勝が中国古代の秦の始皇帝の末裔だとする説がある、という指摘だ。

著者水谷氏は古代史に関する著作が多い研究者だ。水谷氏によると、「日本書紀」には、「百濟から『弓月君（ゆつきのきみ）』が自分の国の民を120

の県から率いて帰化した」と書かれており、一方、時代が下って平安初期に書かれた「新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）」には「太秦公宿祢（うずまさのきみのすくね＝注：秦河勝の尊称とされる）は、秦の始皇帝の3世孫孝武王之後（注：子孫）なり。男（注：息子）功満王、仲哀天皇8年に来朝す。男（その息子）融通王（一名弓月王）、応神天皇14年に来朝す。127 県の百姓を率いて帰化し…」とある。新撰姓氏録の「融通王（一名弓月王）」が日本書紀の「弓月君」と同一人物なら、秦の始皇帝の3代後の孝武王の息子の息子になる、という。

とすると、秦河勝は、秦の始皇帝の末裔であり、秦河勝の末裔である川勝さんは秦の始皇帝の末裔ということになる。この伝承について、ぶしつけな私はこれもズバリご本人に尋ねてみた。ご当人は、騒がず驚かず「そういう伝承があるネ」とさり。むしろ楽しむ風に、こんな逸話を聞かせてくれた。結婚する際、奥さんに自分の家系が“ただならない”ことをおごそかに語ったというのだ。

ただ、古事記には、秦造の祖（はたのみやつこのおや＝注：秦氏の先祖）や漢直の祖（あやのあたいのおや＝注：漢氏の先祖）が応神天皇朝に帰化してきたことが記されているが、彼らの名前もどこからやってきたかも記されていない。日本書紀の弓月君に関する記事にも、弓月君が秦氏の祖先であるとは一切書かれていない。「弓月君が秦氏の先祖なのか、秦造の祖が本当に弓月君なのか」。水谷氏はそこを問題視し、「何とも言えない」と慎重だ。

井上満郎京都産業大名誉教授の力作「秦河勝」では「（始皇帝末裔伝承は）後世の主張」という。真偽は深い歴史の闇の中である――。

資料が少ない古代史はいろんな推理ができて面白い。とくに秦始皇帝伝承は川勝さんの人柄も相まって本で読む2倍楽しめた。川勝さんも現在と古代を行き来しながら楽しんでおられる。まさに、「歴史とは、現在と過去との尽きることを知らぬ対話である」（E. H. カー『歴史とは何か』）と知った。